



くにちゃんブログ (ジャンル：ビヨンド・ザ・フェンス)

キーワード 「存在」「あり方」&「生きる」「日常」

2006年10月01日から2010年08月30日まで(逆順)

橋本さんのお考えが書かれているものを抜き出しました。

(橋本さんのお考えのかかれていない案内は案内自体省いています。)

吉橋のピンときた(^^)ワードで文章を抜粋してみました。

ここにきて、キーワードで抜き出すと、他の文章が洩れてしまうのがもったいないのが気になりました。でも全部残すと「時系列」と同じになってしまうし…。逆に、「辞典」のように、端的に定義づけされたものだけを抜き出していくのも面白そうと思ったりもします。(「〇〇=××××」のように)。

文章に強い力を感じて好きなのは「第56回ビヨンド・ザ・フェンスのご案内とご挨拶 2010/07/31」です。また、「第44回ビヨンド・ザ・フェンスご案内 2009/08/24」の一部分。「第47回ビヨンド・ザ・フェンス(小さな公演)のお知らせ 2009/11/30 16:04」の一部分は、「(経験したことがないため)ホントかなあ…でもきっと、ホントのことだろうな!」という気がしました。これらも掲載させていただきました。

2011年1月 吉橋 編

「存在」「あり方」	3
第55回ビヨンド・ザ・フェンスのご案内 2010/07/12 21:38	3
第48回ビヨンド・ザ・フェンス with チェロ、クリスマス公演のお知らせ 2009/12/18 13:11	3
第44回ビヨンド・ザ・フェンスご案内 2009/08/24 22:59	3
10/30 : 第34回ビヨンド・ザ・フェンス 2008/10/29 00:36	4
7/27 : ビヨンド・ザ・フェンス 2007/07/17 14:30	4
「生きる」「日常」	6
第55回ビヨンド・ザ・フェンスのご案内 2010/07/12 21:38	6
第49回ビヨンド・ザ・フェンスのご案内 2010/01/08 00:03	6
第47回ビヨンド・ザ・フェンス (小さな公演)のお知らせ 2009/11/30 16:04	6
第47回ビヨンド・ザ・フェンスのご案内 2009/11/03 11:56	7
第44回ビヨンド・ザ・フェンスご案内 2009/08/24 22:59	7
4/23 : 第40回ビヨンド・ザ・フェンス with 岡山睦美 2009/04/18 17:33	8
10/30 : 第34回ビヨンド・ザ・フェンス 2008/10/29 00:36	8
7/27 : ビヨンド・ザ・フェンス 2007/07/17 14:30	8
2/1 : ビヨンド・ザ・フェンス 2007/01/23 17:06	9
第56回ビヨンド・ザ・フェンスのご案内とご挨拶 2010/07/31 23:54 (全文)	10
第44回ビヨンド・ザ・フェンスご案内 2009/08/24 22:59 (抜粋)	12
第47回ビヨンド・ザ・フェンス (小さな公演)のお知らせ 2009/11/30 16:04 (抜粋)	12

「存在」「あり方」

第 55 回ビヨンド・ザ・フェンスのご案内 2010/07/12 21:38

大阪市西区の片隅にある洞窟 CAVE で、
ある決まった日にそこへ行けば、
いつもプレイバックシアターや舞踏が行われている。

人々にとって、月に何度かフラッとその洞窟に足を運び、
時には語り、時にはオドルことで、

深い内面から響いてくる周波数と同調し
現実世界で生きている自分の在り方を調整することが
日常化した祭儀になっている。

だんだん面白い町になってきました。

第 4 8 回ビヨンド・ザ・フェンス with チェロ、クリスマス公演のお知らせ 2009/12/18 13:11

大神子研究クラスではかつて、カンボジアでの体験にインスパイアされたショートフォーム「バイヨン」
(カンボジア国民に愛されている遺跡の名前)を生み出しましたが、これで3つの美しいプレイバック・
ショートフォームが日本から発信されることになるのは楽しいですね。

僕にとってワクワクするテーマなので、また改めて、プレイバックのショートフォームや、場の情報とそこ
に存在する

人の感情や感覚に触れるダンス作品作りにフォーカスを当てたクラスを開催してみたいと思っています。

第 4 4 回ビヨンド・ザ・フェンスご案内 2009/08/24 22:59

僕の観察では、メッセージが言語化されていなくて、「知性化」へ引っ張られる要素が非常に少なく、観客
が自由に自分の見方で見るができること、そして意味づけも任されているような設定の工夫（演出）
がなされた舞台空間の中では、パフォーマーの舞踏から生き生きとした生命感をともなった「意識状態」
が直接的に観客に手渡されるように思えます。

ダンサーが「作品メッセージ」の表現を意識せず、余計な重さや「汚れ」を持たない分、見ているものの
自我構造を透明なまま通過して、今ここに存在する観客という「一人の人」の深みを直接打つことが可能
になっているようです。

僕は、普通にこの世を生きる人間として、日常の些細な場面の中に居ながら、そこに生きている感覚の変容に向き合って自由に旅するようなあり方に関心があります。

10/30 : 第 34 回ビヨンド・ザ・フェンス 2008/10/29 00:36

プレイバックシアターにおける「ウォームアップ」は心身を通して、存在そのものへ向かう準備であること。

たとえば礼拝の前に、身なり、身体、呼吸、思考を整え、必要なエネルギーを受け取る準備をすることに似ています。

またアクターは、人間関係のもつれを解き、本当の自分自身としてのあり方・生き方を回復させるために、大きな源泉から浸透して来るエネルギーを受信する媒体（代理人）としての働きを持つこと。

そのエネルギーを認識し敬意を払っていない場合、パフォーマンスを「有効に」するための技術は神聖な雰囲気やテラーの語るストーリーの重さ、すなわちテラー自身の存在の重さを損なう方向に働くこと。

プレイバックシアターの儀式的手続きは、これらのエネルギーがいわば「自動的」に、つまりコンダクターやアクターの計らいとは関係なく、シアターの場に訪れるための「器」を整えることだということ。

そしてそのようなエネルギーによって浸透されたプレイバックシアターの「場」においては我々が「失敗」と呼ぶような出来事は起こりえず、すべてが共時的に意味を持つ空間が出現するという。などを参加者全員で目撃することができました。

そのような「場の力」が存在する空間でのプレイバックシアターは、肉体の動きよりもエネルギーのダイレクトな動きがストーリーを表現するようになり、アクティングは能舞台のような雰囲気をかもし出します。

7/27 : ビヨンド・ザ・フェンス 2007/07/17 14:30

このパフォーマンスは・・・

- ・きっと、毎月行われます。
- ・おおむね、小さなスペースで行われます。
- ・おそらく、シアター・ザ・フェンス（プレイバックシアターの劇団）のメンバーによるパフォーマンスが行われます。
- ・必ず、参加された方の「人生」に対して敬意が払われます。
- ・すべからく、参加された方のどんなお話であっても、アクターは誠意を持って、即興で演じ、お返しいたします。
- ・もとより、このパフォーマンスは存在と我々をひとつに結びつける「物語」の持つ力を信じ、地球上に

生きるすべての人々の「語られなかった物語」に捧げられるものです。

吉橋註：「説明文に、以下がなくなりました。

- ・たぶん、このパフォーマンスには「自分自身への気づき」や 「他者の人生への共感」などが含まれます。
- ・すべからく、いろんな方々にお目にかかれることを 楽しみにしておりますが、もし誰もいらっしゃらなくても 「パフォーマンス」は行われます。
- ・もとより、このパフォーマンスは「存在」に対して捧げられるものだからです。(2006/10/01)」

代わりに以下が付加されました

- ・「すべからく、参加された方のどんなお話であっても、アクターは誠意を持って、即興で演じ、お返しいたします。
- ・もとより、このパフォーマンスは存在と我々をひとつに結びつける「物語」の持つ力を信じ、地球上に生きるすべての人々の「語られなかった物語」に捧げられるものです。」

「生きる」「日常」

第 55 回ビヨンド・ザ・フェンスのご案内 2010/07/12 21:38

大阪市西区の片隅にある洞窟 CAVE で、
ある決まった日にそこへ行けば、
いつもプレイバックシアターや舞踏が行われている。

人々にとって、月に何度かフラッとその洞窟に足を運び、
時には語り、時にはオドルことで、

深い内面から響いてくる周波数と同調し
現実世界で生きている自分の在り方を調整することが
日常化した祭儀になっている。

だんだん面白い町になってきました。

第 4 9 回ビヨンド・ザ・フェンスのご案内 2010/01/08 00:03

決して明るい期待を持てる新年ではないのですが、仲間たちからの挨拶には生き生きとしたエネルギーがあふれています。

皆さんが毎瞬間生きておられる場所・空間は、皆さんお一人お一人の雰囲気満たされていることと思います。皆さんのそばにおられる方々はいつもそれを感じることができるんですね。

僕も皆さんとご一緒させていただいた時には、その雰囲気を感じることができます。

ありがとうございます。

「それぞれの予感」に満ちたこの 2010 年も、「自分自身という雰囲気」とともに、ていねいに生きていきたいと思います。

第 4 7 回ビヨンド・ザ・フェンス（小さな公演）のお知らせ 2009/11/30 16:04

舞台上で演じられる、もしくはアクターによって「生きられる」テラー（お客様の一人）のストーリーは見る者すべてが共有できる人間の人生のエッセンスを含んでいます。

見るものの視力とコミットによって、舞台上という結界の中で繰り広げられるアクティング=舞踏の世界の中に自分自身に必要な体験・知恵・洞察をいくらでも望みのままに見ることが可能になります。

すなわちこの意味で、プレイバックシアターにおける「舞台」とは、舞台芸術を許容する全人類がアクセス可能な「アカシクレコード」への扉だと言ってみたくと思います。

一つの町や村に、この意味での一つの劇場=扉があり、その地に生きる民衆に対して親しく機能していること。

まず自分の住む町で実現していきたくと思います。

第47回ビヨンド・ザ・フェンスのご案内 2009/11/03 11:56

ビヨンド・ザ・フェンスの舞台にいるとき、
時間がとまり、“今”しかないような感覚に陥ります。

毎月の公演ですが、私にとってはその時間のみが
日常の枠を超えて、別個の空間として起こっているように
感じられます。

そして、各月のビヨンド・ザ・フェンス同士は
ほかの日常経験と別の場所で、連続して記憶されています。

シアター・ザ・フェンス 橋本仁美

第44回ビヨンド・ザ・フェンスご案内 2009/08/24 22:59

皆様へ。

昨日の CIMJ@びわ湖ホールでの「場所とコンタクト」コンテンポラリーダンス作品ショウイングに、素晴らしいセンスを発揮するダンサー達とともに参加できたのは本当に幸せな体験でした。

それぞれの作品チームの仲間は、びわ湖ホールの建築構造やびわ湖の景色そのものと対話を重ねて、自分の感覚を全開にし、見る者がはっとするような、あるいはフワッと自由になるような、また思索の深みに誘われるような、日常の感覚世界とは異なるダンス空間を作り出すことができました。

僕の観察では、メッセージが言語化されていなくて、「知性化」へ引っ張られる要素が非常に少なく、観客が自由に自分の見方で見ることができること、そして意味づけも任されているような設定の工夫（演出）がなされた舞台空間の中では、パフォーマーの舞踏から生き生きとした生命感をともなった「意識状態」

が直接的に観客に手渡されるように思えます。

僕は、普通にこの世を生きる人間として、日常の些細な場面の中に居ながら、そこに生きている感覚の変容に向き合って自由に旅するようなあり方に関心があります。

自分自身の確かで、そしてときにおぼろげな感覚を通じて、その瞬間の日常場面にピッタリ重なり、織り込まれている多次元のリアリティの扉を開けていきたい（生きたい）と思います。

そのような「日常の行為」が僕にとってのコンタクト・ダンスであると思います。

4/23 : 第 40 回ビヨンド・ザ・フェンス with 岡山睦美 2009/04/18 17:33

日常とは波長の違う「場」の中で、改めて「日常」を観客として観てみましょう。

日常の境域をいとも簡単に乗り越えていく儀式的営為としてのプレイバックシアターです。

10/30 : 第 34 回ビヨンド・ザ・フェンス 2008/10/29 00:36

プレイバックシアターにおける「ウォームアップ」は心身を通して、存在そのものへ向かう準備であること。

たとえば礼拝の前に、身なり、身体、呼吸、思考を整え、必要なエネルギーを受け取る準備をすることに似ています。

またアクターは、人間関係のもつれを解き、本当の自分自身としてのあり方・生き方を回復させるために、大きな源泉から浸透して来るエネルギーを受信する媒体（代理人）としての働きを持つこと。

7/27 : ビヨンド・ザ・フェンス 2007/07/17 14:30

このパフォーマンスは・・・

- ・きっと、毎月行われます。
- ・おおむね、小さなスペースで行われます。
- ・おそらく、シアター・ザ・フェンス（プレイバックシアターの劇団）のメンバーによるパフォーマンスが行われます。
- ・必ず、参加された方の「人生」に対して敬意が払われます。
- ・すべからく、参加された方のどんなお話であっても、アクターは誠意を持って、即興で演じ、お返しいたします。

・もとより、このパフォーマンスは存在と我々をひとつに結びつける「物語」の持つ力を信じ、地球上に生きるすべての人々の「語られなかった物語」に捧げられるものです。

2/1：ビヨンド・ザ・フェンス 2007/01/23 17:06

第14回ビヨンド・ザ・フェンス（小さな公演）御案内

先日のビヨンド・ザ・フェンスはシアター・ザ・フェンス・アブストラクトチームのパフォーマンスでした。ストーリーは3本いただきました。

1 本目は、他者の評価に一喜一憂する生き方から自分自身を大事にする方向へ気づきを深め、さらにまだ見ぬ未知の自分を解放しようと試みる男性のお話。

2 本目は詩作を愛し、詩とともに生きることを望みながらも、生活との両立や、社会的地位と本当の幸せとの関係を探求する女性のお話。

3 本目は、先の2本のお話へのひとつの応答のように現れた幸せな夫婦のストーリーで、キャンプを愛し、自然の中で人々とのつながりを楽しむ生き様がプレイバックされました。

御来場くださった皆様、まことにありがとうございました。

以下は吉橋が好きな文章です^^ 私にとっての新しい世界であり、いつも使っているような言葉が違った大きな意味を持って迫ってきます。

第 56 回ビヨンド・ザ・フェンスのご案内とご挨拶 2010/07/31 23:54 (全文)

皆様。

僕はこの7月中は延べ13日間プレイバックシアターをしていました。

僕の現在の観点では、プレイバックシアターは、非常に効果的な舞台(結界)芸術であり、舞台の構造そのものの持つ実存的・多層的な意味に接近できる興味の尽きないツールです。

ファミリーコンステレーション(グループで行う家族療法)やサイコドラマ(演技を用いたグループ心理療法)やエンカウンターグループ(人間のつながりと変容のためのグループアプローチ)などの20世紀に誕生した効果的なグループメソッドも同じく舞台(結界)構造を用いています。

舞台構造(リチュアル)が一度セットされれば、その「舞台」の上には非日常的なエネルギーフィールドが自動的に現れます。

その上で、舞踏の作品なり、自分の人生の問題なりを、アクター、ダンサーあるいはただ単に舞台上に上がることにご同意してくださった観客(参加者)の身体を用いて配置もしくは造形します。

すると舞台上(結界内)にプールされたフィールドエネルギーが作品やアクターのカラダに作用します。

準備され振付けられた作品は、舞台上では生き生きとした命をもって輝きます。

自分自身の問題点や人生上の問い、人間関係の悩みなどを舞台上に置いてみるとそれはネガティブな悩みの形のままにはとどまらずに、問題の解決や思いがけない気づきや知恵を暗示する新たな造形へと変容していきます。

僕の見解では、この治癒的なエネルギーは、舞台作品に芸術的な命を与えるエネルギーと同じものです。

舞台上で観察されるこのような作品の意味の変容は、再び僕の観察によればアクターやダンサーの意思、あるいは振付家の演出によるものではなく、舞台のフィールドの中から伝達されてくる情報です。

(→形態形成場)

僕がグループ・セラピストとして働くときには、この情報を使って治療(解決)場面まで造形を導きます。

観客のエネルギーとつながって上演される即興の舞踏作品も、このフィールドから上がってくる情報(プレイバックのアクターがよく使う言葉は「降りてくる」)を表現する媒体となることがあり、その場合は見ている者の個人的な内面生活に対して治療的・生産的な影響を与えます。

人の精神的な変容や癒しは、セラピストや舞踏家や教師や宗教家が行うのではなく、任意に設定された特定の場所・位置・空間・時間に現れる、目に見えない「情報」(エネルギー)が行っているということ。

僕にとって、これはとても楽しい観察です。

もう、自分の内面の「問題」や「生き方」について、セラピストや教師や宗教家の「知識」に頼る必要は、基本的にはなくなるからです。

自分自身と自分をそこに「置く」舞台(結界)空間があること。

すなわち、私自身の全身心と、その心身に対して密接にコミットした時空間があること。

僕はこのコミットのことを今は、「舞台でオドルこと」と呼んでみたいです。

シアター・ザ・フェンスのプレイバックは、さらに「オドル」方向に向かっていきます。

そして、テラー(語ってくださるお客様)からいただく言葉・ストーリーによる造形が我々のオドリへの振り付けとなります。

第44回ビヨンド・ザ・フェンスご案内 2009/08/24 22:59 (抜粋)

一見、意味不明な感じとともに眼前に現れるコンテンポラリーダンスの空間ですが、にもかかわらず、心動かされて涙する観客が居るとき、その涙はとても深いところから湧いてくる情感であるように思います。

僕の観察では、メッセージが言語化されていなくて、「知性化」へ引っ張られる要素が非常に少なく、観客が自由に自分の見方で見るができること、そして意味づけも任されているような設定の工夫（演出）がなされた舞台空間の中では、パフォーマーの舞踏から生き生きとした生命感をともなった「意識状態」が直接的に観客に手渡されるように思えます。

ダンサーが「作品メッセージ」の表現を意識せず、余計な重さや「汚れ」を持たない分、見ているものの自我構造を透明なまま通過して、今ここに存在する観客という「一人の人」の深みを直接打つことが可能になっているようです。

それゆえ、涙する人も、自分がなぜ泣いているのか簡単には説明できないのです。

それはその人の言語能力が低いからではないと思います。

「それが深いところで動いている」からこそ容易に言葉にならないのではないのでしょうか。

第47回ビヨンド・ザ・フェンス（小さな公演）のお知らせ 2009/11/30 16:04 (抜粋)

舞台上で演じられる、もしくはアクターによって「生きられる」テラー（お客様の一人）のストーリーは見る者すべてが共有できる人間の人生のエッセンスを含んでいます。

見るものの視力とコミットによって、舞台上という結界の中で繰り広げられるアクティング＝舞踏の世界の中に自分自身に必要な体験・知恵・洞察をいくらかでも望みのままに見ることが可能になります。

おしまいです